

性の発育を示す anaplastic glioma と診断された。本例は当初、症状、画像所見ともに局所所見に乏しかったが、一過性、反復性頭蓋内圧亢進症状にて進行した。かかる例には、積極的に早期の生検術を考慮する事が妥当と考えられた。

1A-38) Palatal myoclonus を呈した後頭蓋窩 ganglioglioma の 1 例

前田 高宏・藤田 力  
由良 茂貴・代田 剛 (旭川医科大学)  
田中 達也・米増 祐吉 (脳神経外科)

症例は44歳、男性。1986年交通事故にて他院入院中に頭痛、構語障害にて発症した。CT scan にて左小脳脚に腫瘍陰影を認め、同年3月部分摘出術を受けた。術後に左前頭筋、軟口蓋と喉頭筋の myoclonus が出現した。1989年3月に別の某医にて再度部分摘出術を受けた。1991年10月、心不全による全身浮腫と呼吸停止がおこり、当院内科に入院した。本年1月15日まで人工呼吸器を装着され気管切開とウイニングを行なった後に、3月3日に当科に転科した。神経学的には、両側方視時の複視、回旋性眼振、顔面を含む左半身の知覚鈍麻、左上下肢の失調、左前頭筋、軟口蓋と喉頭筋の myoclonus を認めた。CT scan では左小脳脚に一部石灰化を伴う直径 1.5 cm の腫瘍を認めた。Myoclonus は電気生理学的所見より、brain stem reflex myoclonus と考えられた。また睡眠時ポリグラムの所見を提示し、若干の文献的考察を加え報告する。

1A-39) 悪性脳腫瘍の超選択的動注化学療法における薬剤灌流領域の Dynamic CT による検討

倉島 昭彦・伊藤 靖  
小池 哲雄・武田 憲夫 (新潟大学脳研究所)  
田中 隆一 (脳神経外科)  
岡本浩一郎・伊藤 寿介 (新潟大学歯学部)  
放射線科

近年 Intervention の進歩に伴い当施設でも悪性脳腫瘍に対する超選択的動注化学療法を行っている。今回我々は、超選択的に投与した薬剤の腫瘍内灌流分布を把握する目的で、超選択的造影剤注入下で Dynamic CT を行い検討した。

対象：脳血管撮影上複数の主幹動脈から分岐する栄養動脈を有する大脳悪性神経膠腫 6 例。

方法：栄養動脈を分岐する主幹動脈の内の 1 本に超選択的に再循環を無視し得る量の造影剤を10分間定速で注

入し、20分間の Dynamic CT と1時間後の delayed scan を撮影し画像解析した。

結果：複数の栄養動脈が存在する場合、1本の栄養動脈による増強は腫瘍内の一部分で、増強パターンは extravasation が主であり一部血管床による造影も反映した。注入直後に増強が見られなかった腫瘍内部分への造影剤の拡散を示す有意な density の上昇はとらえられなかった。

結論：腫瘍全域へ薬剤を到達させるためにはそれぞれの栄養動脈または主幹動脈への超選択的分割注入が望ましい。

1A-40) 集学的治療に於ける悪性グリオーマ患者の免疫パラメーターの変動

伊林 至洋・丹羽 潤  
森本 繁文・田辺 純嘉 (札幌医科大学)  
端 和夫 (脳神経外科)

目的：悪性グリオーマに対する治療法は未だ確立されたものはなく、又その成績も悪い。当施設では同調化学放射線療法にインターフェロン (IFN) を加えた免疫化学放射線療法を行っているが、今回は主に治療中の免疫パラメーターの変動につき報告する。

方法：症例は脳幹部グリオーマ2例を含めた悪性グリオーマ11例である。治療は手術後5例、手術が不可能な患者6例に対し、VCR, ACNU, 5600 rad の同調化学放射線療法に加えて連日 300万単位の IFN の投与を行った。検査項目は一般検血、生化学の他、NK 活性、LAK 活性、リンパ球表面マーカーを測定した。

結果：IFN により NK, LAK 活性は全例で上昇した。NK 細胞を示すマーカーとの関連は一部でみられた。手術を施行しなかった6例中4例に腫瘍の縮小効果がみられた。生体内で LAK 細胞の誘導がみられたものにその効果が強い傾向にあった。副作用として白血球の減少がみられた。

1A-41) ヒトグリオーマ細胞株 U118 の糖脂質発現に対する各種サイトカインの影響

八巻 稔明 (新さっぽろ脳神経外科病院)  
末武 敬司・伊林 至洋 (札幌医科大学)  
端 和夫 (脳神経外科)  
賀佐 伸省・牧田 章 (北海道大学医学部)  
癌研究施設生化学部門

目的：腫瘍細胞の細胞膜糖脂質は、抗腫瘍免疫療法の